

福島県大日平遺跡出土の縄文土器と土製腕輪 —角田コレクション紹介7—

Jomon Pottery and Clay Bracelet in Dainichidaira Site in Fukushima Prefecture

吉田 泰幸 (YOSHIDA Yasuyuki)¹⁾

1) 日本考古学協会会員

Member of Japanese Archaeological Association

Abstract

Reports of Dr. Bunnei Tsunoda Collection have been already published had three purposes. First, giving an introduction to unpublished materials. Second, contemporary reevaluating materials previously published by Dr. Bunnei Tsunoda. Third, re-excavation of buried valiant materials. This report measures up to third purpose. From Dainichi Daira site in Fukushima prefecture, two valiant materials were re-excavated. One is pottery in Medium Jomon period restored to original shape. Another is clay object commonly called "Clay bracelet". This kind of material is frequent found from sites in Late Jomon Period.

はじめに

角田文衛博士コレクションは、東北地方の縄文時代資料を中心としている。その中でも、角田博士の出生地である福島県内の資料は非常に豊富である。

現在までのところ、個別に資料紹介をおこなったのは以下の遺跡・地域出土の資料である。

角田コレクション紹介1：青森県榎林貝塚（吉田 2005a）

同 2：山形県最上郡鮭川村切欠上野，岩手県奥州市杉堂，同一関市草ヶ沢，宮城県仙台市三ヶ峯山，福島県福島市地藏原，同信夫郡あるいは伊達郡内（吉田 2005b）

同 3：宮城県東松島市室浜貝塚（吉田 2004）

同 4：同里浜貝塚（渡辺・吉田 2005）

同 5：福島県福島市矢細工（吉田 2007）

同 6：秋田県男鹿市角間崎貝塚（吉田 2006）

このうち、榎林・室浜・里浜・角間崎の各貝塚はすでに角田博士によって報文が発表されていたが（角田 1936・39a・b，角田・三森 1939），当時は発表されていなかった資料の紹介と，既発表資料の今日的な再評価をおこなうものであった。

対して，それ以外は，埋もれた好資料を再発掘するものであった。今回は後者にあたる。前述した資料の多量さに比例するように，この種の資料は福島県内遺跡から見いだされることが多い。このことは，上記のリストからもうかがえる。

今回紹介するのは，福島県伊達郡川俣町大日平遺跡出土の復元土器と，「土製腕輪」と称されている土製品である。

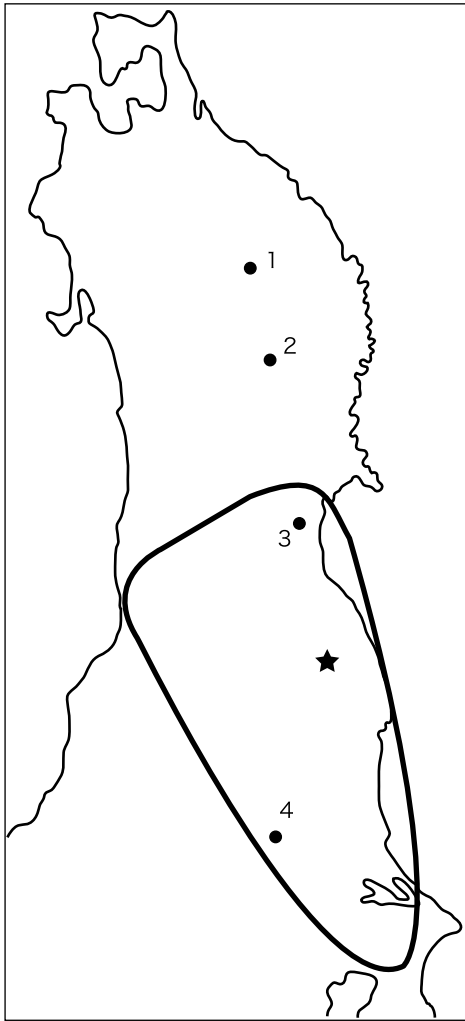


図1 大日平遺跡の位置(★)と図5関連遺跡(●)および土製腕輪Ⅲ類の分布範囲(図中の番号は図5中番号と同じ)

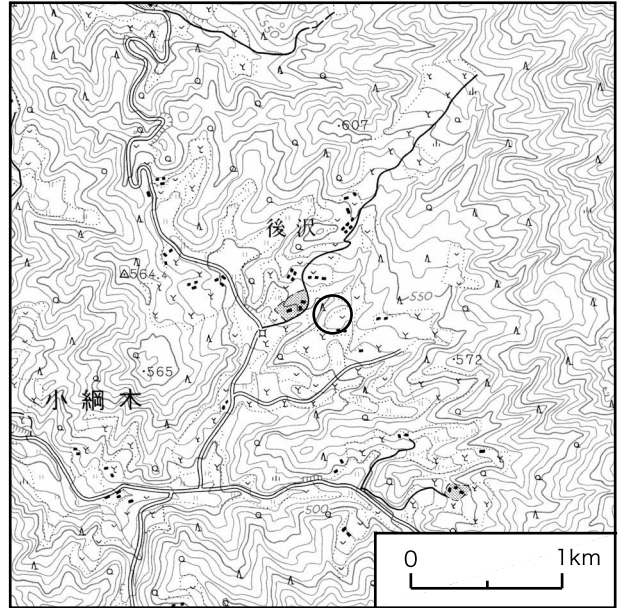


図2 大日平遺跡(○)付近地形図(国土地理院発行2万5千分の1地形図-飯樋-)

遺跡の立地と資料の概要(図1・2)

角田博士の発掘時は伊達郡小綱木村内、現地名では川俣町に大日平遺跡は位置する(図1・2)。

資料総数は1014点である。そのうち1点が復元が可能であった深鉢形土器で、縄文時代中期初頭の大木7a式に比定される。その他、1006点は縄文土器片、土製腕輪が1点、石器が6点という構成である。それぞれの箱に注記札が添付されており、A-1, A-2, A-4, A-5, A-9という注記がみられた。その

他に「A 地点第1層」というものもみられ、A以降の番号は層位番号を示している可能性が高い。

縄文土器について(図3)

口縁部から底部まで途切れることなく接合し、器形やサイズを確実に知りうる深鉢形土器である。編年的位置は縄文中期初頭の大木7a式と考えられる。「A-2」の注記札が添付された箱から見いだされた。

高さは39.0cm、口径は23.0cm、底部径は12.6cmである。器形は円筒形に近い。文様帯は口縁部に集中している。口縁部は8単位の文様帯ということもできるが、図3左上に示した上面観において上下にみられる、ブリッジで接続された3つの突起をひとつのモチーフと考えれば、大きな2単位と小さな2単位の計4単位の文様帯ということができる。ひとつは欠損していたが、どれも内面に渦巻状のモチーフがみられたと考えられる(図3左上・右上)。この渦巻状のモチーフは後続する大木8式以降を特徴づけている。4単位のうち、向かい合う大きな2単位には把手状の装飾がほどこされ、片方はもっとも高さがあり、その部位を正面にして写真を撮影した(同下)。把手状とは言いながらも、土器の自重に耐えられるほどのものとは思えない。そのため、装飾の意味合いが強いと考えられる。

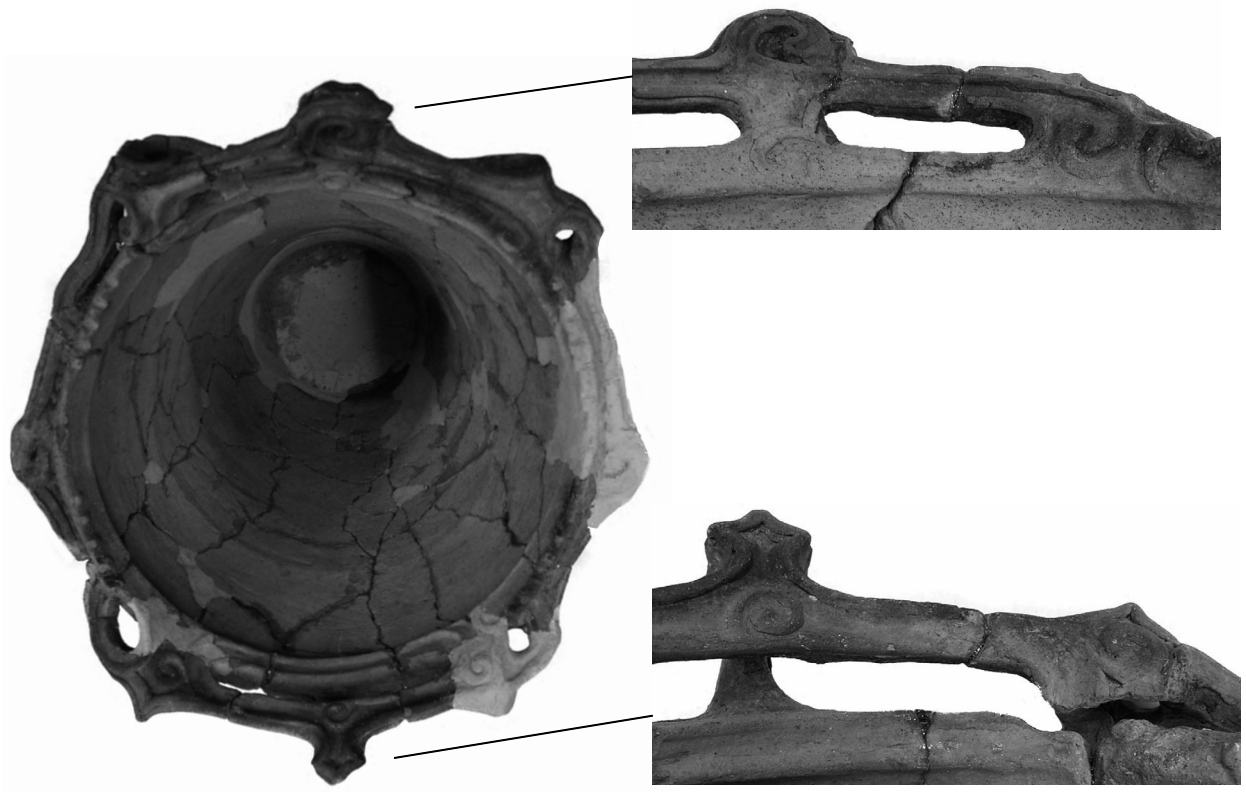


図3 大日平遺跡出土の大明7a式復元土器

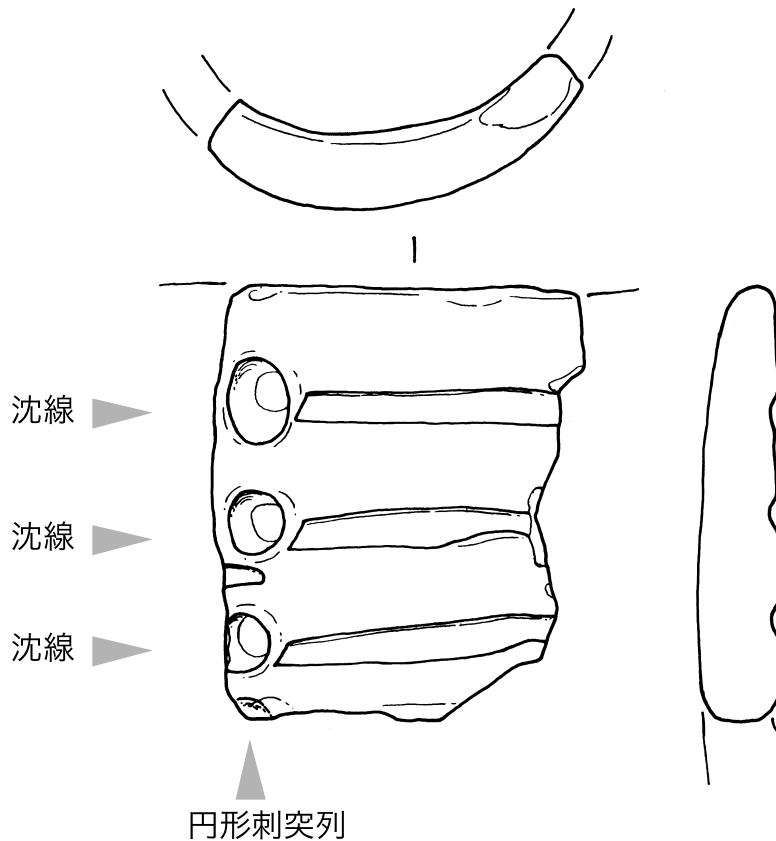


図4 大日平遺跡出土土製腕輪（縮尺実大）

胴部には単節LRの縄文が横位にほどこされている。頸部に若干の屈曲がみられるが、文様帯を形成するわけでもなく、それ以下と同様の縄文がほどこされているのみである。

土製腕輪について（図4・5）

本資料（図4）は角田コレクション受け入れ時の集計では土器片としてカウントされていたものである。しかしながら、本資料は「土製腕輪」、「環状土製品」と称されるものとみてよい。「A-1」の注記札が添付された箱から見いだされた。

土製腕輪は人骨の腕に嵌って出土したわけではないので、括弧付きで表記せざるを得ない資料である。人骨供伴貝輪の内径と土製腕輪の内径の比較から、貝輪と同等のサイズのものもあるが、全てが「腕輪」としての用途があったかは疑問視されるものである（吉田2008）。吹野富美夫氏によって縄文後期前葉の堀之内式期に多くみられることが明らかになっている（吹野2000）。

土製腕輪は以下のⅠ～Ⅳ類に分類される。

Ⅰ類：素環状の形態である（図5-1）。

Ⅱ類：突起付環状の形態である（同2）。無文のものがほとんどであるが、縄文をほどこすものもある。Ⅲ類の一部と上面観が似る場合があり、形態上の関連がうかがわれる。

Ⅲ類：沈線や隆起などで側面に段をつけた形態（同3）。多数装着した腕飾の状態を模しているとも考えられる形態である。ところどころ円形の刺突がみられるものがあり、この点も半環状・長方形の装飾品を多数組み合わせた状態をあらわした可能性がある。

Ⅳ類：貝輪を模したと思われる形態である（同4）。模倣の対象としてはオオツタノハ製貝輪が考えられる。1遺跡から破片が多量に出土する傾向にある。

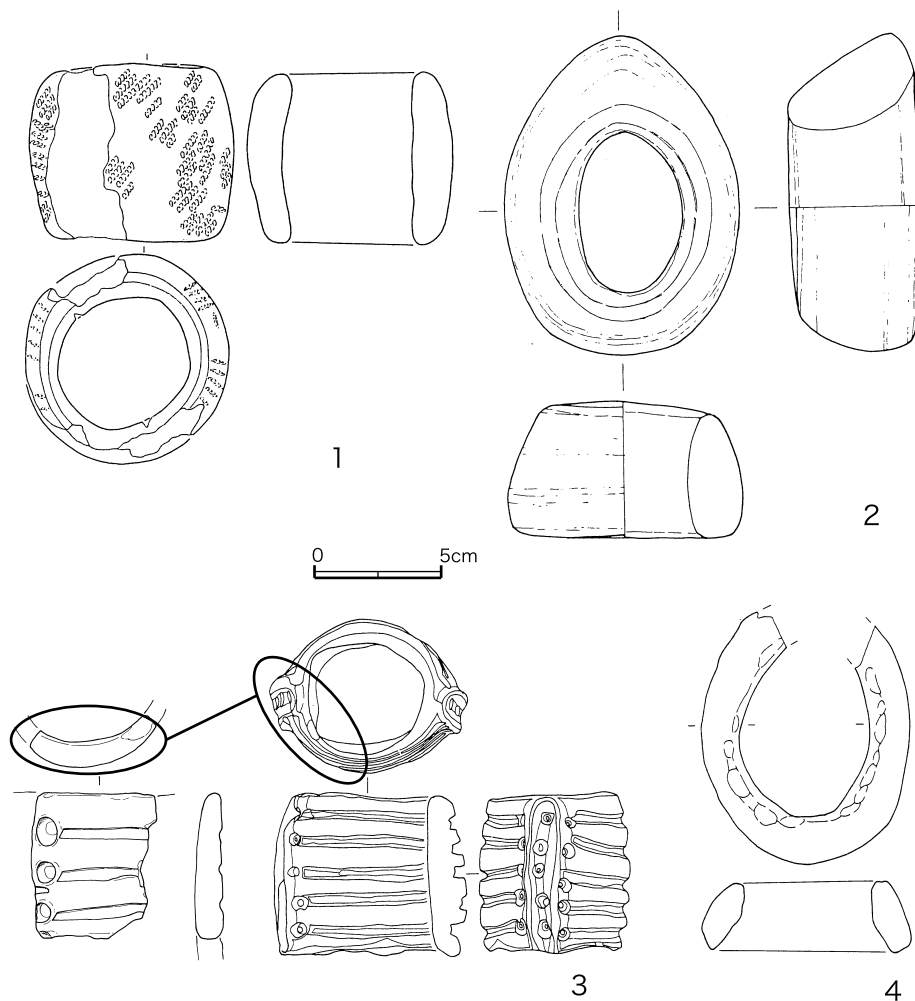


図5 土製腕輪実測図（縮尺3分の1）と本遺跡例との比較（左下）

1：Ⅰ類（岩手県向館，笹平1994），2：Ⅱ類（同葦内，工藤1982），3：Ⅲ類（宮城県山口，佐藤1981），4：Ⅳ類（栃木県藤岡神社，手塚1999）。

本資料は上記分類のⅢ類にあたる。装飾品を組み合わせ、何段も重ねたような形態である。縦方向の円形刺突列と、横方向の複数の沈線の特徴とする（図4）。円形刺突列が、モデルとなった装飾品に穿たれていた孔を表していると解釈する。本例は破片であり、少なくとも4段以上重ねた装飾品の状態を模したものである。

破片であるが、そのサイズも類例に非常に近い。完形品との比較を図5の左下に示した。上面からみた曲線もよく一致する。

土製腕輪は白色顔料が塗布されることも多く、このことが土製腕輪と同じく縄文後期において盛んであった、貝製・イノシシ犬歯製の骨角貝・および歯牙製装飾品を模した可能性を高めている。残念ながら本遺跡例には白色顔料の付着はみられなかった。本遺跡からの出土は、宮城県から東関東という、これまでのⅢ類の分布状態の枠内である（図1）。

本例が破片であったため当初土器片と認定されていたように、各地における再発見も今後期待したい。

おわりに

角田博士の関心の多くは東北北部の貝塚遺跡に向けられていた。これは博士による発掘調査時期が

縄文研究の黎明期にあたり、分層発掘による土器編年の整備や最古の土器の追求が急務という、当時の学問状況が要請したものであろう。そのためもあってか、冒頭に述べたように福島県内の資料は非常に豊富であるが、反比例するように角田博士自身による報文は皆無に近い状態である。しかし本稿にみるように、埋もれた好資料は確実に本コレクションに内包されている。こうした再発掘は、今後もおおいに期待される。

謝 辞

本稿作成にあたって、その機会を賜るとともに種々ご教示いただいた渡辺誠名古屋大学名誉教授と、縄文土器の編年的位置についてご教示いただいた大竹憲治氏に御礼申し上げます。

引用文献目録（アルファベット順）

- 吹野富美夫（2000）縄文時代の土製腕輪，常総台地，**15**, 67-83.
- 工藤利幸（1982）葦内遺跡，岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書，32.
- 笹平克子（1994）向館遺跡発掘調査報告書，岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書，206.
- 佐藤 洋（1981）山口遺跡発掘調査報告書，仙台市文化財調査報告書，33.
- 手塚達弥（1999）藤岡神社遺跡（遺物編），栃木県埋蔵文化財調査報告，197.
- 角田文衛（1936）陸前里浜貝塚の尖底土器，史前学雑誌，8-5, 17-26.
- （1939a）陸奥榎林遺跡の研究，考古学論叢，**10**, 153-175.
- （1939b）羽後角間崎遺跡の土器，史林，**24-3**, 130-139.
- ・三森定男（1939）先史時代の東部日本，人類学・先史学講座，12.
- 渡辺 誠・吉田泰幸（2005）宮城県里浜貝塚製塩土器の再発見—角田コレクション紹介4—，名古屋大学博物館報告，**21**, 1-8.
- 吉田泰幸（2004）宮城県室浜貝塚出土資料の研究—角田コレクション紹介3—，名古屋大学博物館報告，**20**, 55-69.
- （2005a）青森県榎林遺跡出土の榎林式復元土器—角田コレクション紹介1—，古代文化，**57-3**, 41-43.
- （2005b）アメリカ式石鏃5点及び関連資料2点—角田コレクション紹介2—，古代文化，**57-11**, 45-48.
- （2006）秋田県角間崎貝塚出土の礫石錘—角田コレクション紹介6—，名古屋大学博物館報告，22, 1-10.
- （2007）福島県矢細工遺跡出土のスタレ状圧痕—角田コレクション紹介5—，古代文化，**59-1**, 147-149.
- （2008）縄文時代における「土製腕輪」の研究，古代文化，**59-4**，印刷中。

（2007年10月30日受付）